

## 女なのか彼女なのかどっちや

僕が泳いだのと同じ様に、動いている。  
「あれっ、僕も笑われてたのか」

泳ぎは僕よりずっと上手だ。

先生が立っていたところには、  
おばさんがバスタオルを持って  
立っているのが見える。

しばらく、バックで流して、  
プールから上がると、  
バスタオルを受取り、  
体をさっとふき、ゆかたを着た。

そして、僕の方をにらんだ。

僕は、咄嗟に、顔を隠し、  
そのまま窓から逃げた。

部屋に戻ると、  
もう皆、寝ているので、  
僕も、床に入った。

僕の頭には、今見た女の人の白い体と、  
八幡の彼女の姿が混同して来た。  
なかなか、頭から離れない。

「おれ、女に飢えているのかなあ。」と思った。  
「女なのか彼女なのかどっちや。」と思った。  
僕は、自分がきたないと思った。